

廊をめぐる景色：『源氏物語』の一表現方法

波多野, 真理子
九州大学大学院 (博士課程)

<https://doi.org/10.15017/9420>

出版情報：語文研究. 80, pp.12-22, 1995-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



廊をめぐる景色

—『源氏物語』の一表現方法—

波多野 真理子

葦でふいた廊にたたずむ光源氏と二人の従者、惟光と良清。彼らの眼前にはうら寂しい須磨の浦が開け、大空を雁が飛び渡り、二艘の船が沖の彼方に浮かぶ。廊の周りの前裁では秋の草花、萩、薄、紫苑などが、所狭しと咲き乱れている。

これは、桃山時代に活躍した大和絵師土佐光吉によって描かれた『源氏物語紙絵・須磨』の二景である。光吉は『源氏物語』のどのような場面を絵画化したのか。該当部分を次に挙げよう。

前裁の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮に、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふさまの、ゆゆしうきよらなること、所がらはましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよやかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて、ゆるるかに誦みたまへる、また世に知らず聞こゆ。沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行くなども聞こ

ゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮べると見やらるるも、心細くなるに、雁の連ねて鳴く声楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠に映えたまへる、古里の女恋しき人々、心みな慰みにけり。(須磨②一九二頁)

政敵との争いによって、須磨に謫居することになった光源氏の侘び住まいの様子である。季節は秋。有名な「須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、」で始まる場面に続く部分である。

こうして原典と比較してみると、光吉の絵は概ね原文に忠実に描写されたものであると言えよう。ただ、本文と絵とでいささかずれた印象を受ける点は、「紫苑」の位置である。原文では、廊に位置する光源氏の衣装に「紫苑色」が見えるのに対し、光吉が描く絵では「紫苑」は草花のそれとしてその姿を現している。廊の左手部分を占めている前裁の草々の中に、確かに紫苑が、それもかなり目立つように描かれているのである。もちろん、原文にある、いろいろな「前裁の花」の中には、萩など他の秋の草花と共に紫苑の花も含ま

れているだろう。しかし、実際、本文で表現されている「紫苑」は、光源氏の衣装の色を意味しているのである。

二

『源氏物語』において、紫苑の花が前栽の一つとして具体的に描かれることがあるのだろうか。『源氏物語色紙絵』に見られるように、前栽の他の草花に比して印象ある役割を何か担っているのだろうか。

普通、平安期の物語で「紫苑」といえば、紫苑色の衣、とりわけ襲の色目を指す場合がほとんどである。

まづ尚侍の殿昇り給ふ。階は御手を取りてのぼせたてまつり給ふ。着給へる、唐綾の御衣一かさね、紫苑色の夏の織物の桂、紅の三重がさねの御袴。
〔宇津保物語〕樓上下⁴〕

……母屋の簾に添へたる几帳のつまうちあげて、さし出でたる人、わづかに十三ばかりにやと見えて、額髪のかかりたるほどよりはじめて、この世のものとも見えず、うつくしきに、萩襲の織物の桂、紫苑色など、押し重ねたる、頬杖をつきて、いとものなげかしげなる。
〔堤中納言物語〕貝合

秋の野に咲く紫苑は、比較的大きな黄色の雄蕊と青みがかった薄紫色の細長い花卉の集まりから成っており、それに因んで付けられた薄青紫色を紫苑色という。襲の色になると、表薄色（薄紫）裏青、表薄紫裏明黄、または表蘇芳裏明黄など、諸説があつて、明確にどれとは決し難いが、色の配色はともかく、表布と裏布の一枚が織り成す第三の色はやはり紫苑の花のもつ薄紫色であろう。

織物であれ、襲であれ、この色を身に纏う女人や公達の姿が平安散文学作品に登場するのは珍しいことではない。秋の代表的色目である萩や女郎花などと共に、物語の世界に彩りを与えているのである。そして、もちろんそれは物語世界に限る事ではなく、実社会の反映でもある。『枕草子』には中宮定子に仕候する色とりどりの女房の姿が、

「……女房の装束、裳、唐衣、をりにあひ、たゆまでさぶらぶかな。御簾のそばのあきたりつるより見入れつれば、八、九人ばかり、朽葉の唐衣、薄色の裳に、紫苑、萩など、をかううて居並みたりつるかな。……」⁶

と表現されており、また、

上よりおるる途に、弁の宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、昼寝したまへるほどなりけり。萩・紫苑、いろいろの衣に、濃きがうちめ心ことなるを上に着て、顔はひき入れて、硯の宮にまくらして、臥したまへる額つき、いとらうたげになまめかし。

〔紫式部日記〕

紫式部も、萩、紫苑色を着た同僚女房の寝姿を描いている。

このように、衣類の色である「紫苑」はしばしば見られるのだが、実際の花である紫苑となると、ほとんど描出されることはない。『徒然草』一三九段で、

秋の草は、萩・薄・桔梗・萩・女郎花・藤袴・紫苑・吾木香・刈萱・龍胆・菊・黄菊も。蔦・葛・朝顔、いづれもいと高からず、ささやかなる、牆に繁からぬ、よし。

と、秋の草が他の季節の草花と共に挙げられているが、ここでは、兼好の趣好による取捨選択がなされているというより、一般的な秋

草を一挙に提示した感がある。好悪をはっきり述べる清少納言に至っては、すばらしいと思う草花の中に紫苑を入れていない。「草の花」といって、撫子、女郎花、桔梗、朝顔、刈萱、菊、龍胆、萩など、ほとんどの秋の草花を列挙しながらも、紫苑はそこから外されているのである。

『源氏物語』においても、作品中「紫苑」「紫苑色」の全七例中六例までが、衣装の色を表す語である。少女巻の例を見てみよう。八月、光源氏がかねてより造営していた六条院四季の町が完成し、「彼岸のころほひ」に人々は「二条院などから移り住む。そして九月、秋の町の庭は植樹の紅葉がすっかり色づき、えも言われぬ風情が漂っている。主人の秋好中宮は、春の町に住む紫上に秋のすばらしい情趣を誇示するため、美しい花や紅葉をさし上げようと女童を遣わすのである。

風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、いろいろの花紅葉をこきませて、こなたに奉らせたまへり。大きやかなる童の、濃き相、紫苑の織物重ねて、赤朽葉の羅の汗衫、いといたう馴れて、廊渡殿の反橋を渡りて参る。(③七五頁)

西南にある秋の町から東南の春の町へと、二つの町の間を結んでいる「廊渡殿」を渡る女童の姿に紫苑色が見える。汗衫は童女の表着の上に着るものであるから、「紫苑の織物」とは、その下、裨の上に着る表着のことであろう。秋に「廊」を紫苑が彩っているのである。他の例はどうか。野分が吹き荒れた翌朝、虫籠を持って六条院秋の町の庭にいる女童達は、周りで咲き乱れている草花と見まがうかのような、いわば人物と風景が同化一体化しているとさえ言える華やかな姿であった。

中将下りて、中の廊の戸より通りて、参りたまふ。朝ぼらけの容貌、いとめでたくをかしげなり。……童べ下ろさせたまひて、虫の籠どもに露かはせたまふなりけり。紫苑撫子、濃き薄き柏どもに、女郎花の汗衫などやうの、時にあひたるさまにて、四人連れ、ここかしこの草むらによりて、いろいろの籠どもを持ってさまよひ、撫子などのいとあはれげなる枝ども取りもてまゐる、霧のまよひは、いと艶にぞ見えける。(野分③二六五頁)

そして夕顔巻、前裁の色色乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。廊の方へおはするに、中将の君、御供に参る。紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかにひき結ひたる腰つき、たをやかにまめきたり。(①二二頁)

時節にかなった紫苑色の着物を着用しているのは、六条御息所の女房中将の君。源氏が御息所邸から帰途につこうとする朝、その美しさについて懸想ばむ相手である。場所は「廊」につながる「隅の間の高欄」で、眼前には光源氏の足を止めた前裁が色とりどりに咲き乱れている。

このように、『源氏物語』に見られる「紫苑」は紫苑色の衣を指すものである。匂宮に見られているとも知らず「廊の中の壺前裁」を眺める浮舟も、はなやかな「紫苑色」の衣を装っていた。

帷子一重をうち懸けて、紫苑色のはなやかなるに、女郎花の織物と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。……こなたの廊の中の壺前裁のいとをかしう色々に咲き乱れたるに、遣水のわたり石高きほどいとをかしければ、端近く添ひ臥してながむるな

りけり。(東屋⑥五四頁)

ただ一列、衣装の色を表していないと思われるものがある。

吹くるおひ風はしをにことく／＼に、ほふ空もかうのかほりもふ
れはひ給へる御けはひにやといと思ひやりめてたく心けさうせ
られてたちいてにくけれど……(『源氏物語大成』八七〇頁)

という野分巻の一例であるが、この「紫苑」はおそらく草花の紫苑
であると思われるものの、文意が今一つ明らかになっておらず、古
来問題になっている箇所である。河内本系と別本のうち保坂本では
「しをに(紫苑)」を「し、うのか(侍従の香)」という本文になっ
ているのは、香りの強くない紫苑では文意が通じないゆえ、矛盾な
く理解できる本文を採った結果であろうか。

この一例を除くと残りは全て衣の色である。そして、それらが配
されている場所に、ある共通点があるように思われる。紫苑色の衣
を身に着けた登場人物が「廊」と近接する場所に置かれているので
ある。「廊」に向かう源氏に付き従う「紫苑色」を着た中将の君、海
の見える「廊」に佇む「紫苑色」の衣の光源氏。どちらも前栽が咲
き乱れた中のことである。また「紫苑の織物」を着た女童が「廊」
を渡り、色とりどりに咲く前栽の中、「紫苑」色を身に着けた女童が
歩き回る。そして、「廊」の近くにおいて「紫苑色」で飾られている浮
舟。総角巻の例の、かげ物である「紫苑色の細長」(⑤二六〇頁)
を除く五例全て、「紫苑」色の近くに「廊」が見えるのである。

もちろん、「源氏物語」において「廊」のことが触れられている箇
所はこの五例だけというわけではない。「廊ども」「中の廊」併せて
他に二十八例が見られる。しかし、その大半が次のように、建物の
構造部位を単に指す言葉としての機能に終始するものである。

また海の中の龍王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、
いよいよ鳴りとどろきて、おはしますにつづきたる廊に落ちち
かりぬ。炎燃えあがりて廊は焼けぬ。(明石②二一七頁)

……あなたの御前は竹の透垣しこめて、みな隔てことなるを、
教え寄せたてまつれり。御供の人は、西の廊に呼びすゑて、こ
の宿直人あひしらふ。(橘姫⑤一三二頁)

そこには、「廊」から見た前栽の様子が描かれることはない、よし
んば、「廊」に居並ぶ人物の姿が植物に擬すような色とりどりで描か
れてあったとしても、その季節が秋であることはない。

馬場殿は、こなたの廊より見通す、ほど遠からず。……対の御
方よりも、童べなど物見に渡り来て、廊の戸口に御簾青やかに
懸けわたして、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童下
仕などさまよふ。菖蒲襲の相、二藍の羅の汗衫着たる童べぞ、
西の対のなめる。好ましく馴れたるかぎり四人、下仕は棟の裾
濃の裳、撫子の若葉の色したる唐衣、今日の装ひどもなり。(螢
③一九七頁)

六条院夏の御殿の馬場で行われる競馬を見物する人々は、菖蒲襲、
若葉色など、時節にふさわしい色々に装っている。五月のことであ
る。

若菜下巻の朱雀院御賀試案でも案所である廊に案人が並んでいる
が、時は春正月。紫苑色を着た人物など望むべくもない。
今日は、青色に蘇芳襲、案人三十人、今日は白襲を着たる、辰
巳の方の釣殿につづきたる廊を案所にして、山の南の側より御
前に出づるほど、仙遊霞といふもの遊びて、雪のただいささか
散るに、春のとなり近く、梅のけしき見るかひありてほほ笑み

たり。(④二六八頁)

ここに、唯一、廊のまわりに景物があり、しかも季節が秋という例が一例ある。

……荒れたる崩れより、池の水かげ見えて、月だに宿る住み処を過ぎむもさすがにて、おりはべりぬかし。もとよりさる心をかはせるにやありけん、この男いたくすすろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけて、とばかり月を見る。菊いとおもしろくうつろひわたり、風に競へる紅葉の乱れなど、あはれと、げに見えたり。(帚木①一五四頁)

しかし、これはいわゆる雨夜の品定めで、左馬頭の体験談の一つである。「源氏の物語」においては例外と見做しても良いものである。とすれば、「廊」をめぐる秋の風景が紫苑色で彩られているのは確かであるし、また決して偶然でもないと思われる。秋であっても、「廊」のない所には「紫苑」は存在しないのだから。

ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露はなほかかる所も同じごときらめきたり。……白き袴、薄色のなよよかなるを重ねて、はなやかならぬ姿、いとらうたげに、あえかなる心地して……(夕顔①三三一頁)

八月十五夜、五条あたりにある夕顔の陋屋の描写である。「薄色」は先にも触れたように薄紫色の事。荒れた屋で「白き袴」に薄色の衣を重ねた夕顔の色彩は、須磨巻で「白き綾」と「紫苑色」であった光源氏の姿に通じる。が、やはり根本的に両者は異なる。夕顔の宿に廊などはない。廊のない所に紫苑もあり得ないのである。

ではなぜ、「源氏物語」において「紫苑」が廊の周辺にめぐらされているのか。ここで思い起こしてみたいものがある。白楽天の詩の一節、「廊を繞る紫藤の架、砌を夾む紅葉の欄」(『白氏文集』巻第二・秦中吟・傷宅)である。朱塗りの門内には美しい建物が整然と建ち並び、周囲は高い塀に囲まれている、そうした立派な邸宅の有り様を描いた詩である。廊下を紫藤がぐるりと繞り、石だたみの両側には芍薬が植えられている富める家。

中宮彰子に新楽府を講義するほどの紫式部が、新楽府に続く、同じ諷諭詩である秦中吟を知らなかったことはあるまい。実際、この一節は「源氏物語」中にそのまま引かれている。

他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにはほ笑み、廊を繞れる藤の色も、こまやかにひらけゆきにけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。(胡蝶③一五九頁)

「三月二十日あまりのころほひ」に行われた六条院春の町で行われた船案の様子を描いた一場面である。春の花々が咲き誇り、庭の池に浮かぶ龍頭鶴首二隻の船は唐風仕立てで、「ただ絵に描いたらむやう」に美しい。藤、山吹をはじめ、他所では季節はずれの桜までがここでは今が盛りと咲き誇り、水鳥たちが飛び交う風情は本当に浮世離れたものである。女房達が「まことの知らぬ国に來たらむ心地」と感じるのも無理はない。

ここで「廊」を取り巻いて咲いているものが、藤なのである。これは『白氏文集』からの翻案、つまり立派な邸宅を描写し、諷諭した「傷宅」からの借用表現であることは疑うべくもない。唐風の美しさを描いた場面にふさわしい景観であり色調であると見えよう。

唐絵的世界において、廊に添えられるべきものは「紫藤」であり、晩春に薄紫色の花を咲かせる藤なのであった。

このように、紫式部は、唐風を手本とした美的感覚では、廊の周りを彩るのにふさわしい植物は藤であることを知っていた。しかるに、『源氏物語』においては、胡蝶巻の一場面以外では藤は廊を繞っていない。廊の周りにあったものは、同じ薄色でも春ではなく秋に咲く紫苑である。こうした、春の藤から秋の紫苑へ、という「ずらし」がなされているのはどうしたことなのだろうか。

その問いに答える前に、まず日本における藤の役割を考えると、唐絵に對して、大和絵では藤はどのように扱われているのだろうか。

屏風に描かれた藤を多く詠んだのは紀貫之である。「延喜十五年の春齋院の御屏風わか、うちの仰によりてたてまつる」歌の中に、池のほとりに藤の花松にかかれる

緑なる松にかかれる藤なれどおのがころとぞ花は咲きける

〔貫之集〕五〇

とあるのをはじめとして、

松にさける藤の花

藤の花あだにちりなばときはなる松にたぐへるかひやなからん
散りぬともあだにしもみじ藤花行ききとほく松にされば

〔同〕二二四・二二五「延喜御時内裏御屏風のうた」

など、「閨の前に藤の花松にかかれる」〔同〕二一九、「松にかかれる藤」〔同〕一九一を題材にしたものが数多く見られる。貫之の時代には、松にかかる藤の絵が「大和絵屏風の類型的構図として多く存在し」、歌題として一般的になっていたのである。

この伝統は、以来大和絵の世界に踏襲される。長保元年（九九九）藤原彰子の入内に際し、父道長が贅を尽くして詠えた屏風にも松にかかる藤の絵が描かれていた。

（中宮のうちにまゐり給ふ御屏風わか）

人の家に松にかかれるふぢを見る

紫の雲とぞみゆる藤の花いかなるやどのしるしなるらん

〔公任集〕三〇七

この大和絵屏風は、村上天皇の頃の高名な絵師常則の手に成るもので、当時既に名作の誉れが高いものであった。その屏風に、他の五つの画題とともに「松にかかれる藤」がみられるということは、そうした絵柄が和歌の題材として人々の間に広く浸透していたことの現れであろう。清少納言は、「色あひ深く花房長く咲きたる藤の花、松にかかりたる」のを「めでたきもの」の一つに数えており、『源氏物語』でも「大きな松に藤の咲きかかりて」（蓬生巻）、「五葉に藤のいとおもしろく咲きかかりたる」（竹河巻）などがある。さらに、四月内大臣家で催された藤の宴でも、愛でるべき対象である藤は松にからんでいた。

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに澄みわたれり。

げに、まだほのかなる梢どものさうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。（藤裏葉③四三二頁）

片桐洋一氏によれば、中国では、常盤木松からむ蔓草の類は遊仙・神秘的世界の発現であるという。それが、我が国に入って、漢詩、唐絵世界に持ち込まれた時、蔓草と同種の葛藤等が加わり、中でも藤が色彩、絵柄的に好まれ、定着していった。そしてそれは、

実際の庭園製作にも大きく影響を及ぼし、大和絵屏風の世界にまで普及、その結果、絵柄は様式化されるに至る。⁽¹³⁾「藤松樹花」は、『春日権現験記絵』など絵巻類にも類型的に描かれている典型的な一歌題なのである。そして、何よりも撰関時代、藤は藤原氏のシンボルとも言うべきものであり、その華美さは慶賀の場にふさわしいめでたいものと見做されていた。

藤には、このように松と結びつくという、大和絵的にいわば固定化した概念が付随していたから、「廊」の風景に収めることはできない。そこで、「廊に紫藤」という唐的景観を春から秋へ、樹から草へ、賀から雑へというずらしを起し、和様化する形で提出されたものが、「廊に紫苑」なのではないだろうか。

四

紫苑は藤に比べ、そもそも高貴で華美な花ではない。二メートル近い高さにまで生長する花で、その割には花の部分が小さく、どちらかといえば野生の素朴な印象を与えるものである。木の花のもつ絢爛豪華さに及ぶべくもない。そのせいか、紫苑色は「あてやか」「はなやか」と形容され、一見上品なイメージを有しているようであるが、それは桜や藤のような第一級の美しさではないように思われる。

まず、散文世界では、先述したように草花としての紫苑の姿はほとんど見られず、人物を彩る衣の色として登場する。

八月ばかりに、白きひとへなよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑の衣のいとあてやかなるをひきかけて、胸をいみじう病め

ば、友だちの女房など、数々来つとぶらひ、外の方にも若やかなる君達あまた来て、……『枕草子』一八三段「病は」

清少納言の女房仲間の一人であろうか、胸を患い苦しんでいる病人が、白い単に紫苑襲の表着を着ている。「薄色に白襲の汗衫」を「あてなるもの」(三九段)とする『枕草子』の作者には、病で青白い顔、白い単に薄紫色、紫苑色の組み合わせは、その美意識にまさに適ったものであったように思われる。

また、落窪の姫君が少将との結婚第二夜に着ていたのも「紫苑色のほり綿」であった。

紫苑色の綾のなよかなる、白き、またかの少将の脱ぎ置きし綾の単着て、髪は、このごろしもつくりひければ、いとうつくしげにて、たけに五寸ばかり余りて、ゆらめき行く後手、いといみじくをかしげなり。
〔落窪物語〕巻一)

これは、少将のことを知った中納言北の方が、怒って姫君を中納言の前に引き連れ出した時の姫君の姿である。この「紫苑色」の衣は、姫君付きの女房阿漕が主人の結婚準備のために叔母から借りた、「いとあやしけれど、おのが着むとしたりつる」のものであった。阿漕の叔母は、もと宮仕女房で、今は和泉守の妻である。貴族の娘といっても、逆境にある姫君には受領階級の人物が着るような衣装で整えるのがやっとなのだが、少将の目にはそれでも十分に美しく見えたのだった。

概して、紫苑色の衣を纏う人物には女房クラスの者が多い。前述の『紫式部日記』における寝姿の宰相の君、『宇津保物語』や『栄花物語』などでは、内親王付きの女房達が「紫苑の裳」「紫苑色の桂」で着飾っている。⁽¹⁴⁾ただ女房といっても、一般庶民からすれば、高貴

な上流階級の人物である。

『今昔物語集』には、月明かりの夜に宮中豊楽院周辺、宴の松原付近を歩く「紫苑色ノ綾ノ柏」を着た女童を近衛舎人が見かける話がある(巻二七・三八話「狐変女形值播磨安高語」)。その女童は実は狐が変身していた姿だったのであるが、舎人にとっては、「濃キ打タル柏ニ、紫苑色ノ柏重ネテ着タル女ノ童ノ、前ニ行ク様体頭ツキ云ハム方無ク、月影ニ□□テ微妙シ」と見えたのである。同様に、「紫苑色ノ綾ノ衣一重」姿の信濃国郡司の妻も、砂金運上使の役目にある滝口にとつて、「頭ツキ姿細ヤカニテ、額ツキ吉ク、有様此ハ弊シト見ユル所無」い女であった(巻二十・十話「陽成院御代滝口金使(行語)」)。

紫苑色は禁色である濃紫色とは異なり、聴色の範疇に属するものであるから、誰でも着用できるとはいつても、そこにはおのずと限界があろう。当時は、官位によって衣服の色が規定されていた時代であったから、黄色を常の色とした無位の者や下層の者にとつては、紫苑色は「あてやか」な色であり、それを着た人物を「何レノ御方ノ人」かと思うのも当然のことであるように思われる。しかし、あくまで聴色は聴色である。下位に属する者には高貴な色であり人であると目に映っても、それはあくまで第一級の美しさではなく、二級のそれに止まるのである。そして、『源氏物語』にもその原理は貫かれていようである。

先に見たように、夕顔巻、乙女巻、そして野分巻の三例は女房であった。物語の主人公光源氏が紫苑色の衣を着ていたこともあったが、その時の源氏は須磨流謫中である。その「こまやかなる直衣」もおそらく「無紋の直衣」であらう。無位無官状態である。彼がこ

うした状況にあるのは、後にも先にもこの流謫時代だけであった。宇治十帖に入ると、紫苑色の着物は、大君が中君の結婚にあたって、後朝の祝儀として匂宮に贈らせた「紫苑色の細長」(総角巻)と、匂宮が垣間見た浮舟を彩っていた衣(東屋巻)、その二例である。いづれも女房とまではいかずとも、身分の高い姫君ではない。先に見た、他作品における「紫苑」と共通した美的感覚がそこにはある。

次に、和歌の世界に目を投じてみると、そこではその美しさ、可憐さを詠まれることはない。

しをに

よみ人しらず

ふりはへていざふるさとの花見むとこしをにほひぞうつろひに
ける (『古今集』巻第十・物名四四一)

初出からして物名歌である。『古今和歌六帖』でも七首「しをに」を詠んだ歌が見られるが、それらもやはり言葉を弄し、三十一文字にその名を詠み込んだ物名歌なのである。

うけたむる袖をしをにてぬきとめばなみだのたきのかずはみて
まし 伊勢

さきはてて今はあらじと思ひしをにはかくれてもにほひけるか
な つらゆき

(『古今和歌六帖』第六「草・しをに」三七七七・三七七八)

「しをに」という言葉の持つ響きが、和歌が織り成す叙情世界とは相入れなかったのだからか、それともよほど難詠の歌語であったのか。「紫苑」が漢語であることもそれに関わっているとも思われるが、ただ、和歌の世界に取り入れたいほどの素材であれば、和語に変換することも可能である。例えば、「忘れ草」の和名をもつ「萱草」のように。しかし、紫苑はそうした和名をもたない。前出の和歌の

他に、躬恒、元真、順等の歌、下って近衛院御製歌にも「しをに」を詠んだ和歌は見えるが、全て物名として一首に歌い込まれたにすぎない。他の秋草とは異なり、個別な独自世界を作り出しているものではないのである。

古来、秋の草花は七草をはじめ数多く愛でられ、和歌にも多く詠まれてきた。代表的な所で言えば、女郎花、萩、藤袴といったところか。

なきわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ

〔古今集〕巻第四・秋上(三二一)

題しらず

僧正へんげう

名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたる

な

〔同〕(二二六)

ふちばかまをよみて人につかはしける つらゆき

やどりせし人のかたみかふちばかまわすれがたきかにほひつ

つ

〔同〕(二四〇)

例を挙げれば際限がないので、それぞれ一例ずつにとどめたが、それでも十分である。古来、萩は露が置かれる、女郎花が女を擬すのはその名「おみな」の連想から、藤袴といえは「はかま」をというように、それぞれ伝統的に連想産物が固定している。この習慣を踏襲することはあっても、打破し、新しい発想でもって再生産することは極めて困難な作業であろう。

しかし、紫苑は物名の部に採られるぐらいのもので、しかもそれらが織り成す世界は一定していない。換言すれば、格好の韻文的題材ではなく、文学として固定化因習化したイメージがない。だからこそ、そこに新しいイメージを付与する余裕が見出せたのではない

だろうか。ここに秋草としてなぜ紫苑が選ばれたのか、藤からの単なる翻案であるならば、色調が同じ薄紫色のものであればよく、そのような秋草は何も紫苑に限らないのになぜ「紫苑」であるのか、という問いに対する答えがあるように思われる。

五

『源氏物語』須磨巻は、『白氏文集』の影響が色濃く、作者が光源氏を描くときのイメージは唐絵であったとも言われるほどである。

確かに、光源氏謫居の物語は白居易の江州司馬時代の詩篇があちこちに散りばめられ、そうした作品享受が求められているのは明らかである。しかし、だからといって、須磨の源氏の姿を即、唐絵の世界に直結する必要は必ずしもないと思うのである。高橋亨氏の言われるよう、「唐絵」的なイメージは白氏文集などの引用により喚起され、菅原道真に代表される日本の漢詩文の世界を媒介にして、和歌的な表現の世界に重層され、物語のかな文へと変換されている²⁰⁾。異国情緒を醸し出し、唐絵的な物語でありながら、大和絵的な世界が重層し混濁する。唐絵的な「廊に紫藤」から大和絵的な「廊に紫苑」という「ずらし」による新しい世帯の構築がなされたのである。そして、その「紫苑」は廊の傍の前栽を彩っていることはもちろんであるが、表面的には廊の付近にいる人物を彩るものとして描き出される。植物から襲の色目へと対象がずらされているのであった。

このように考えると、従来、物語の構造上矛盾を来していると言われている一場面に、一つの解釈を与えることができるように思われる。東屋巻の寝殿構造である。第二章でも取り上げたが、もう一

度その箇所を挙げる。中君のいる二条院に預けられた浮舟を、匂宮が垣間見る場面である。

帷子一重をうち懸けて、紫苑色のはなやかなるに、女郎花の織物と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。……こなたの廊の中の壺前裁のいとをかしう色々に咲き乱れたるに、遣水のわたり石高きほどいとをかしければ、端近く添ひ臥してながむるなりけり。(⑥五四頁)

これに先立つ部分で、浮舟は二条院において、「乳母、若き人々ばかりして、西の廂の、北に寄りて人げ遠き方に局したり」(⑥三五頁)と述べられていたから、その居住区域は、中君の住む西の対の西廂北部であると考えられる。しかし、「廊の中の壺前裁」の「廊」とは、普通、寝殿と対屋をつなぐものである。つまり西の対からすれば、それは東廂側に当たる。従って、浮舟のいる西の対北西部からは、とても寝殿と西の対をつなぐ廊は見えないだろう。また、西の対の西廂ということ重視するならば、「廊」は、対の西にさらに対屋があり、それらをつなぐ廊ということになる。それとも、玉上琢弥氏が触れているように、浮舟の住処は東の対の西廂北部なのだろうか。それならば、廊は東の対と寝殿をつなぐものになるが、同時に、中君の居住場所も東の対ということになる。しかし、中君は総角巻で「二条院の西の対」に移される予定であると言われていなかったか。あれこれ考えられるが、諸注、明確に判断しているものはない。「廊」の位置がはっきりしないのである。

思うに、この場面は、視覚的な印象から得られた風景をそのまま描出した場面なのではないか。前裁を見つめる女君、それを障子の隙間から垣間見る男。いかにも大和絵的な構図である。ここでは、

物語としての首尾一貫した場面構造は二の次になる。廊の側にめぐらした紫苑と紫苑色の衣で飾られた浮舟。つまり、「廊」の風景に添えられた紫苑、という構図が、物語の一世界を構築し支配しているのである。

けれども、この物語世界は『源氏物語』の世界だけにとどまる一回性のものであった。以後、物語で紫苑色を着た人物はしばしば現れるが、その「紫苑」が物語に働きかけるものは何もない。平安時代後期ともなると、紫苑色の衣装は男性装束、しかも指貫に収束していく。現実世界で実際女君が紫苑色の衣装を纏わなくなったのかどうかは定かではないが、少なくとも物語の世界では女房装束としては見られなくなる。平安時代以降の装束関連書には、「紫苑」といえば「指貫」の項目に現れる。現実を説明した装束書が今度は物語世界を規定していったのか、「紫苑」と「指貫」との結び付きが強固になってゆくのである。

《注》

- (1) 和泉市久保惣記念美術館蔵、清水好子氏『源氏物語五十四帖』(平凡社、昭57)所収。
- (2) 小学館日本古典文学全集に拠る。以下、断りのない限り同じ。
- (3) 衣装の色に関しては、原画を目の当たりにしたわけではないので、微妙な色合いを論じることはできないが、清水好子氏の解説には、光源氏が着ているものは「缥色(薄い藍色)の直衣」とある。(注1前掲書) また夕顔巻でも、「紫苑色のをりにあひたる」衣を着ている中將の君が描かれるが、同じく土佐派の絵では、前裁に大きく紫苑の花が描かれているものの、中將の君は紫苑色の衣装ではなく紅系統の色の着物を着ているようである。(『源氏物語画帖(土佐光則)』(豪華「源氏絵」

(4) の世界 源氏物語」学習研究社、昭63) 参照)

(5) 『装束抄』(三条西実隆)、『物具装束抄』、『河海抄』など。

(6) 一三八段「殿などのおはしまさまで後」(角川文庫、以下同じ)

(7) 『枕草子』六四段「草の花は」

(8) 新編国歌大観に拠る。以下、和歌の用例は断りのない限り同じ。

(9) 片桐洋一氏「松にかかれる藤浪の」(古今和歌集の研究) 明治書院、平3)

(10) これと同じ場面を描いたものに『栄花物語』巻第八「かゞやく藤壺」がある。

大殿の姫君十二にならせ給へば、年の内に御裳着有て、やがて内に参らせ給はむと急がせ給ふ。……屏風より始、なべてならぬ様にし具せさせ給て、さるべき人く、やむごと無所くに哥は読せ給ふ。

……又四条の公任宰相など読給へる、藤の咲きたる所に、紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらむ。

(11) 秋山光和氏「『唐絵』と『やまと絵』」(平安時代世俗画の研究) 吉川弘文館、昭39)

(12) 『枕草子』八四段

(13) 片桐洋一氏、前掲論文

(14) 『栄花物語』には、一品宮である禎子内親王が「紫苑色に朽葉の御衣など」を着ている姿が描かれている。(巻二九・たまのかざり)

(15) 『今昔物語集』巻二七・二八話。

(16) 伊原昭氏「平安の色」(『文学にみる日本の色』朝日新聞社、平6)、『平安朝文学の色相』(笠間書院、昭42) など。

(17) 『倭名類聚抄』には、「紫苑一名紫荷（紫苑之）」とあり、「のし」という和名が見えるが(他に「色葉字類抄」など)、韻文散文作品ではその用例は見当たらない。また、『万葉集』に見える「鬼の醜草」が紫苑のことであるとす説があるが、定かではないと思われる。

(18) しをんに

よひのまとおもひつるまにあきのよはあけしをにしにつきのみゆらむ
(『射恒集』四一)

しをに

みやまきのふたまわけても白露はおかじをにしのみつも見つらん

しをに

露けきは秋の草葉とおもひしをにたることなき袖の上かな

(『後集』巻第十・物名二八)

(19) 丸山キヨ子氏「源氏物語すまの巻に与へた白氏文集の影響」(『源氏物語と白氏文集』東京女子大学学会、昭39)、池田勉氏「須磨の巻についての覚え書」(国語と国文学、昭47・3)

(20) 高橋亨氏「唐めいたる須磨」(物語と絵の遠近法)ペリかん社、平3)

(21) 玉上琢弥氏「源氏物語評釈」角川書店、昭43

(22) 『満佐須計装束抄』(源雅亮)、『次将装束抄』(藤原定家) など。